グリーンマーケティング論の書き方

齋 藤 實 男

ABSTRACT

How should we write a paper, particularly graduation thesis ? It should be constituted of Opening (Introduction), Body and Closing (Conclusion). How should we make the stream from Opening to Closing ? It is the theme of this note for university students.

Opening is a part to display problems and our view points like a root which is shared with readers. Closing is a part to display the answers of the problem. It should not have different things from the Opening. Body is a part to explain the problem and to display how to solve the problem. Body is constituted of some chapters which has a logical linkage each other.

We recommend you that you choose an way of writing from the abstract or the general through the special to the concrete or the individual. This stream is completed by this method to link logically between chapters, which has also some paragraphs.

Each chapter has a medium-size Opening and Closing. And each paragraph has a small-size Opening and Closing. The end of medium-

size Closing of the first chapter should introduce the first of medium-size Opening of the second chapter and so on as same as the paragraphs. When we cannot arrange this stream, we have to change the order of chapters or paragraphs. When we would like to script important things which should be excluded from this main stream. These things should be taken to footnotes.

This stream is the logic built by the relationship between the surface phenomenon and the deep bottom essence and by relationship between the observer = writer (für uns), the characters (für es) and the readers. The surface is accounted by the characters and the bottom is accounted by the observer. The relationship between them has an identification phase and an dissimilation one. This role play structure makes the relationship between the phenomenon and the essence clear and more verifiable.

Finally to avoid plagiarism, the Quotation should have author's name and biblio. To cool the hot paper, after we finish writing a paper, we must keep off it for a while and read it again to give others or publish.

キーワード：序（Opening）→本文（Body）→結（Closing），起→承$_1$→承$_2$→承$_3$→結，上向（抽象→具体，一般→特殊→個別，理論→事例），収斂＝まっしぐら，歴史的抽象・異時的社会・異時的空間（時間＝タテ糸）と論理的抽象・同時的社会・同時的異空間（ヨコ糸），役割構造（我－我々，C-O-R［当事者：Characters—書き手：Obeserver—読者：Readers］），コミュニケーション，事実と評価，「価値」自由，ハブ型勉強法，イメージ図，文章密度

序

グリーンマーケティング論は，卒業論文・修士論文でどのように展開してゆけば良いのだろうか？純/大衆文学の詩や小説や推理小説との違いは，どこにあるのだろうか？

この私の即自的で平易な端緒の問いかけは，対自的には，我々が論文の書き方一般を特殊なグリーンマーケティング論の書き方に活かし，そのグリーンマーケティング論でもって，いかに具体的個別的なグリーンマーケティング論の事例を分析するか，という問題にも発展する。また，この叙述は，これらの一般—特殊—個別のつながりが相互媒介的に影響し合っていることを検出する作業でもある。

さらに，記号論的観点から解釈すれば，この作業は，人体の主として頭脳内部の無媒介的なS（Semantic＝意味論的）情報（[E_{1s}・C-1_o]）にすぎない即自的な問いかけが，人体の外部の文字の連鎖＝サイバネティクスの観点から生まれたP (Physical) 情報＝コード＝パロール＝シニフィアンへと排出され，それがまた実態・実体との連関においてシニフェとしてデコードされる，といった相互媒介（「S-P 相互転換」[Y_{am}・N-1]）的な影響を追跡し，その軌跡をつまびらかにする作業でもある。

本ノートは，その作業を披瀝しつつ，上の重層的な問いにたいする答えを，我々が見いだしてゆくための一試論である。この試論は，ゼミの卒論指導の指南書となるものである(1)。

なお末尾に，第2章叙述第2節論文の補足説明として，九州産業大学大学院商学研究科博士後期課程1年齋藤ゼミ生：橋川玄武の分かり易い，資料「卒論の書き方(2)」を掲載した。参考にしていただきたい。

第1章　構　　想

グリーンマーケティング論は，どのような構想をもって展開されるべきか？本章で，我々は，その構想力と方法（武器＝分析道具の集合）を明らかにする。

第1節　構造設計

論文という向日葵の樹液の流れは，どのような筋道を通って天に向かって昇り花となって，結実するのか？

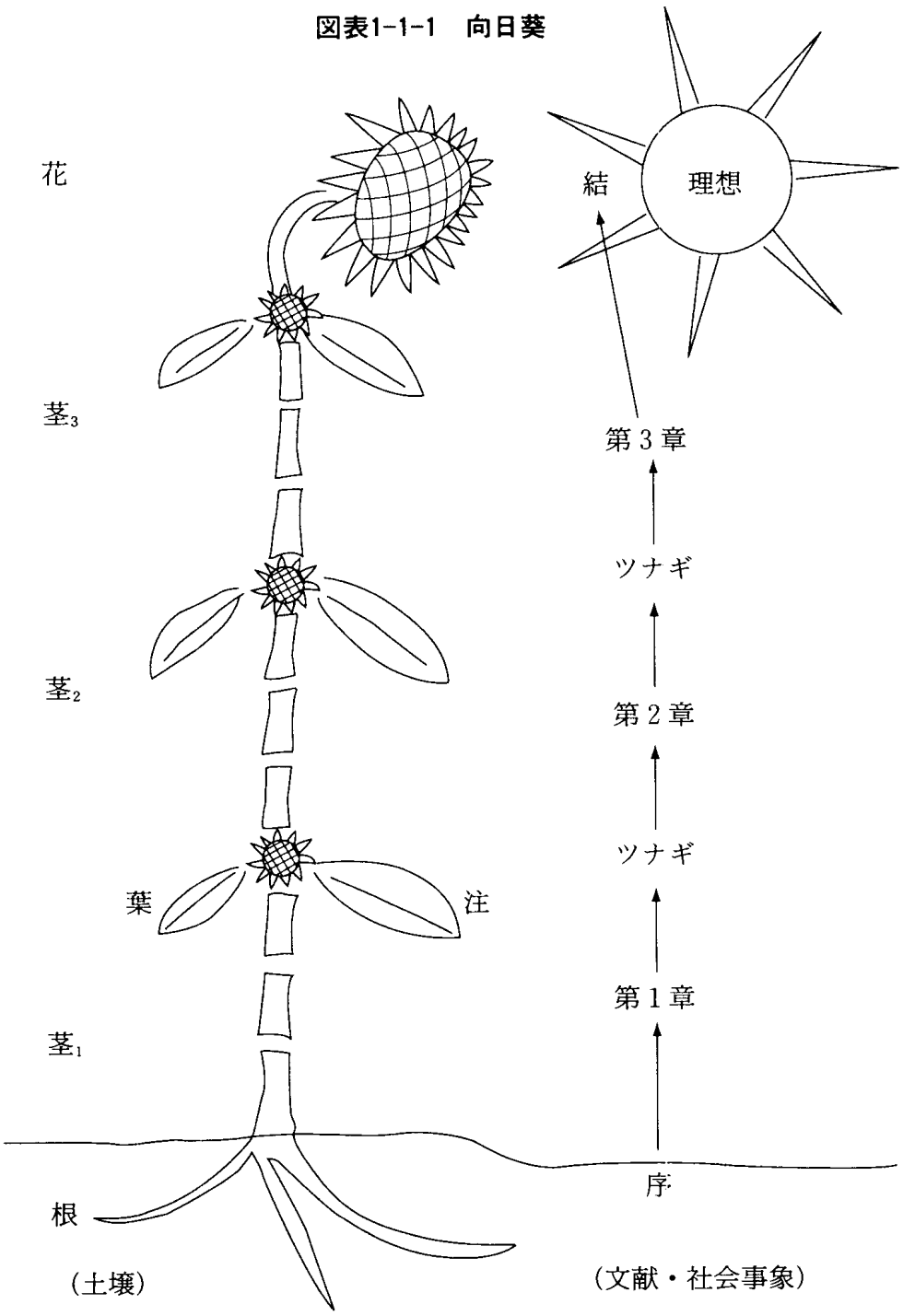
それは，図表1-1-1が描くように，根→茎$_1$→茎$_2$→茎$_3$→花となって，太陽を見る。葉を広げ，空気と光を得ては，炭酸同化作用を繰り返しながら，流れる。根を伸ばし，大地の乳房から乳を呑み樹液にしつつ。

根は序で，茎$_1$は本文第1章で，茎$_2$は第2章で，茎$_3$は第3章であり，花は結である。葉は注であり，空気と光は引用・参考文献である。大地の乳液は，情熱の心，感性であり，正義感や勇気や根性である。早熟でもよければ，茎$_3$は要らない。

序で問題提起(3)し，問題意識を読者と共有し，本文でその問題を解明する論理を展開し，結で序に対応した問題解決としての本文の結論を述べる。乳液の大河は天に向かって，序（Opening）→本文（Body）→結（Closing）と流れ，転じて支流＝枝葉となるものは，注に入れるべきである。起承転結の転は注へ，第1章→第2章→第3章は，承→承→承とリレーされるべきである(4)。結への収斂を。

転がある場合は，次節で述べるように，本文の論理が正→反→合の展開をとったほうが的確なケースに限られる。そこでは反＝転となり，反は，

図表1-1-1　向日葵



正の承である。この場合は言うまでもなく，起承転結で終わるのではなく，転→合が必要であり，起承転合結となる。

このリレーの内包量＝文章密度に関して，序と結は濃密・高速で，本文は相対的に希薄・遅速である。

全体の大構造の中に章という中構造が，あたかも大宇宙の中の小宇宙のように入れ子になっている。先ほどの序を大序とし，結を大結とすれば，各章の冒頭には中序があり，最後に次の章への繋ぎに流れたり，大結に流れてゆく中結がある。これらの中序→中本文→中結／繋ぎは，中構造を形成する。そして，その連続こそが，上の承→承→承のリレーを論理的に可能にさせる。

入れ子については，これら各章は第1節→第2節→第3節という，あたかも竹の節々のような小房を抱えている。したがって，同様に各節は小序→小本文→小結／繋ぎ，という小構造を持つ。

以上は，主として抽象度の高い哲学的論理を述べるテーマの模範的な入れ子・連鎖構造である。この基本構造は，グリーンマーケティング論などの相対的に抽象度の低い論理でも，変わらない。また，サーベイ論文においても，その論調の分類は大分類→中分類→小分類と進む構造を持っているので，基本的には変わらない。

また，論文の分量＝枚数の大小に関わらず，構造は変えてはならないし，序→本文→結の分量，本文の各章・各節の分量も平均分量でバランスがとれていなければならない。しかし，論理を事例によって証明したり，具体的事例を紹介する場合は，具体的事例を述べる後半部の分量が増える場合もある。その場合には注や結の後に資料編などを付加して，このバランスをとるよう努力しなければならない。

このような入れ子構造とその連鎖構造が乳液の通る筋道になるわけである。それでは，次にこの筋道について，その抽象度の深いものから浅いものへと向かう筋道を描く上でのデッサン力＝構想力の磨き方を論じてみよう。

第2節　上向と構想力

序—本文（各章・節間の繋ぎ）—結，注，文献という筋道を描くには，どのような注意と技術力が必要になるのだろうか？

その技術力を含む構想力は，論文一般にも言えるように，下向＝抽象能力と分析能力であり，分析した要素同士を結ぶネットワークジャングルの洞察能力＝想像力であり，一種の上向＝総合力（「分析と総合」見田石介），事例紹介による実証力である。

この論文の構造・構想における上向の論理・事実の分析と評価・実証，登場人物の模写などの点が，図表1-2-1が示すように，創作文学の心理描写・感性的芸術的表現，登場人物の操作などとは異なっている点である。

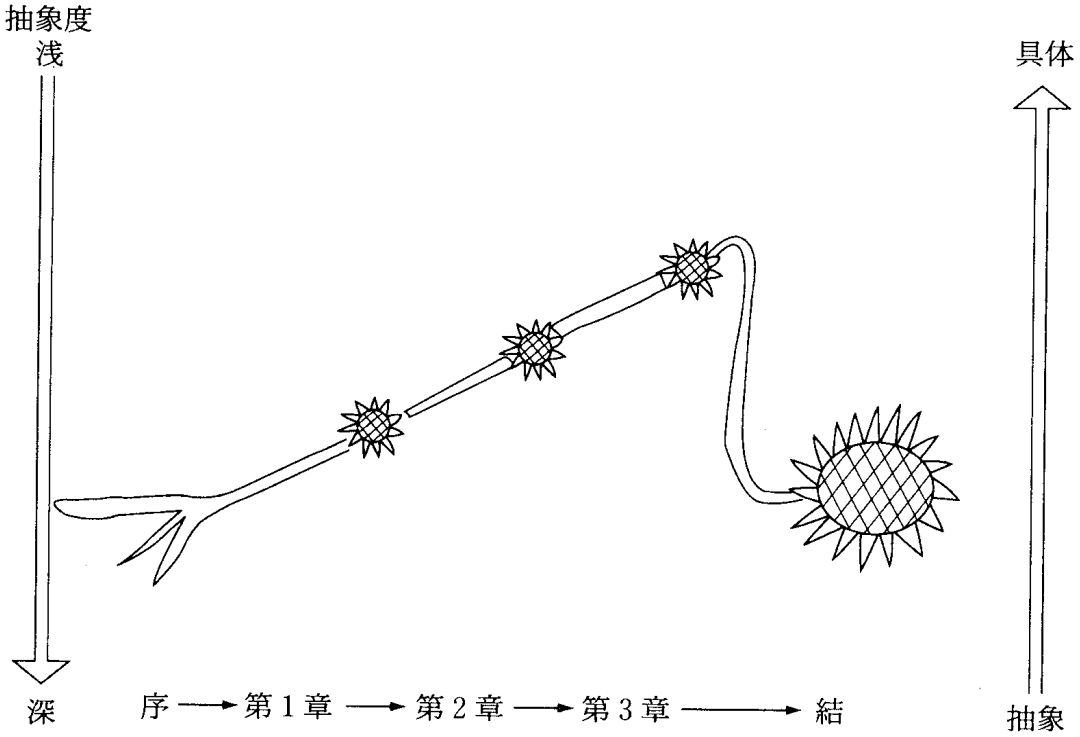
叙述においては，我々は本文では，序の抽象的本質的で全ての問題に広がる小宇宙的で単純な問題提起から出発し，それを受けた一般的抽象的な内容から上向して，図表1-2-2が示すように，特殊な内容を経て，大宇宙における複雑で個別的具体的な内容に至り，結で本文の論理から導かれる序

図表1-2-1　論文（科学）と文学（創作）

	論文（科学）	文学（創作）
叙　　述	序—本文—結 理性（論理） 冷静な視線（論理） 事象分析 技法（主—述語の順） 文章の結束(*2)・正確性 明確な主語	構想自由 感性（心理—苦悩・歓喜など描写） 熱い視線（味(*1)） 人物描写 レトリック（主—述語の順不同） 文章のリズム・音楽が大切 指示代名詞の主語であいまい可
役割構造	C（登場人物）の環境分析 ［シミュレーションでは限定操作］ O（書き手）＝科学者 R（読者）：限定的関心層	Cの自由な操作 ［ノンフィクションは別］ O＝作家 R：一般大衆

(*1)「味の文章と論理の文章」（[F_{ur}・T-1] pp.4-12）参照。
(*2)「結束性」（[F_{ur}・T-1] p.113）「論理性」（[U_{no}・Y-1] p.100）参照。

図表1-2-2　上向イメージ



の問題に対する抽象的な結論を述べる。つまり，深い抽象度から浅い抽象度へ至り，最後に急に深い落差をもって，結に落ちつくのである。

この抽象→具体の論理的筋道は，実際には深度について鋸の刃のようにジグザグになる。歴史的描写においては，過去→現在→未来の歴史的因果の筋道と二重写しの論理歴史的筋道になる場合もあるし，そうはならないで論理論理説的筋道になる場合もある。

この叙述を通して，論理的な小宇宙—大宇宙，単純な要素—複雑な要素の集合，抽象—具体，一般—特殊—個別，また位相が異なるが小空間—大空間，過去—現在—未来史などが相互に作用・影響し関連し合っていることを，うまく表現しておかねばならない。

以上は，抽象度の高いテーマについて特に適合する上向法である。テーマによって，抽象・分類も異なってくる。だから，実証研究では，帰納法・下向法を使う場合も多々ある[5]。具体→抽象の論理的筋道が，歴史的描写に

おける，未来→現在→過去の歴史的因果の筋道と二重写しの論理歴史的な逆の筋道である。

また，論理展開における正→反→合の展開では，第１章の正よりも，第２章の反（転）の抽象度のほうが，鋸の刃のように最初の出だしの中序などで，深くなる場合もある。

例えば，グリーンマーケティング論では，論理歴史説をとって，第１章で過去のグレイな公害型のマーケティング（正）を述べ，第２章で現在のそれに立ち向かうグリーンコンシューマリズム（反）を紹介し，第３章で未来の新しいグリーンマーケティング（合）を展望する場合，グリーンコンシューマリズムについて，アメリカなどの運動原理，例えばケネディー・Ｊ・Ｆの４つの権利について解説する場合に抽象度が急に深くなる場合もある。

また，サーベイ論文[6]においては，起（序）→結の筋道をつけ易くするために，結で述べる書き手の主張から遠いものを前に持ってきて，近いものを後に持ってくる傾向があるので，遠いものが近いものよりも抽象度が浅い場合も多々ある。

このように考えると上向は，基本原理・原則であるが，例外もありえることになる。しかし，この基本原理をベン図などで明確にデッサンし，それに忠実に叙述せんと努力しなければ，読者にとって論理的で分かり易い論文を生むことはできない。この基本原理を崩していく場合は，それが起（序）→結の筋道上やむをえないときである。

最後に，構想力＝技術力について，それは日頃の好奇心と論理能力・資料蓄積から湧き出てくるものであろう。問題意識の鮮明さとその問題を解決する上でのマーケティングの可能性をどれだけ，日々考え，新聞・TV・文献・インターネット・会話などでどれだけ，この問題に関わる資料を収

集し，整理・分類・分析・抽象化してきたか，などのハブ型生活態度(7)に懸かってくる。三年寝太郎も河川工事の発想・工夫・技術・工事の段取りなど自分で大・中・小の問題提起をしては解決したり，考え直していたのである。ゼミ生諸君，葛藤せずに，本当に眠り込んでいたのではダメだ。

以上の2つの節で論じた構造と構想力は，誰のために必要なのか？それは，読者のためであり，読者に自分の主張を理解してもらうためであり，また書き手である自分自身の考えを整理しておくためでもある。このことを次節で討究してみよう。

第3節　役割構造

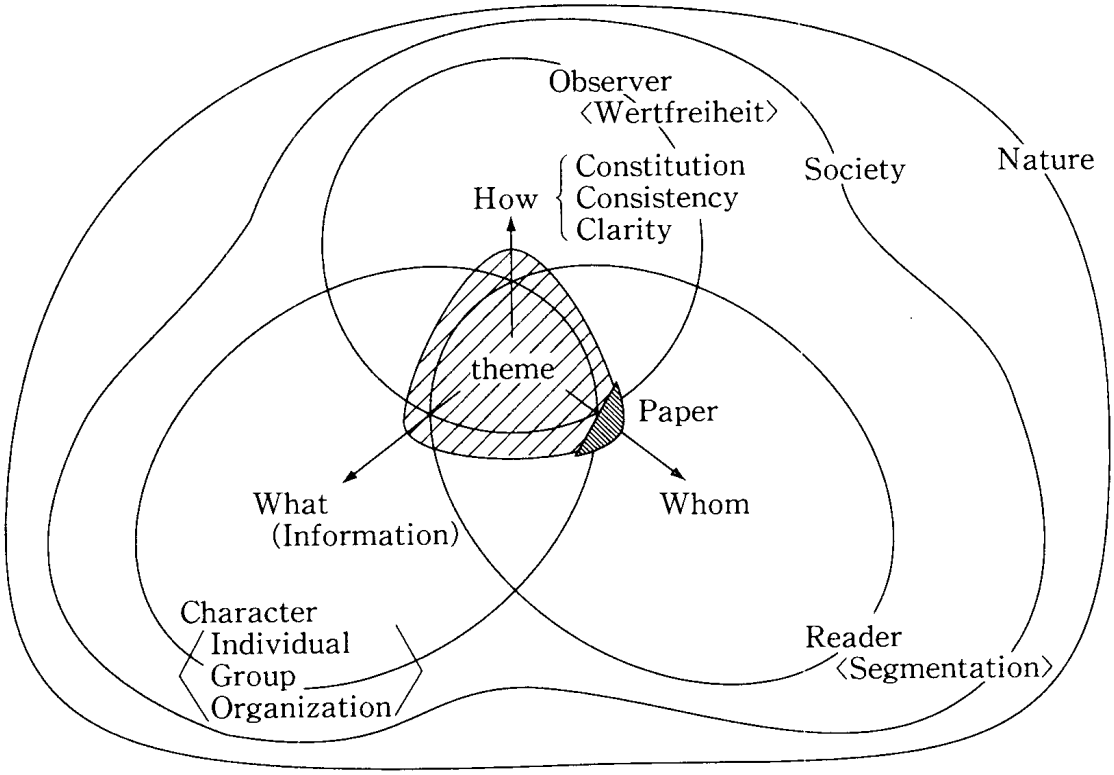
どういう意味から，論文は，モノではなくコトであるのか？論文―ヒトの関連とヒト―ヒトの関連から，このことを考えてみよう。

社会科学とは，一定のテーマと視点をもって，ヒトとヒトとの関係，それらとタテ糸の異時間やヨコ糸の同時間において相互媒介的に影響しあう制度や社会との関係，さらに社会と社会の関係を対象として，その対象を観察・分析・総合する智・学のシステムである。それだけではなく，そのシステムを論文などで表現し，発表する場合には，そこに読者などが登場することになる。

このヒトの関係は，一般的に，図表1-3-1のように，O―C―R，つまりObserver：書き手＝観察者（für uns），Characters：被観察者（für es），Readers：読み手（für uns）の三者構成をとる。この三者については，書き手自身のなかにも反省的自我が潜んでおり，日記風に論文を完成する場合と同様，三者が全て当の書き手であったり，少なくとも二者がそうであったりする。

だから，その視点＝「価値」観の持ち主である論者＝筆者個人と社会を

図表1-3-1　役割構造（O—C—R）



構成するヒト＝当事者との同一・不同一，合致・矛盾，事実と評価の関係が重要になる。この同一・不同一のそれぞれは，即自・対自の作用を抱え込んでおり，同一レベルにおいても観察者の感情移入としての即自的同一化作用もあれば，反省的自我としての登場する相手の立場から自分を視る対自的作用もある。

例えば，同一・不同一，合致・矛盾について，ある観察者が，合成洗剤問題についての意識と購買行動の調査・分析を行う場合，観察対象である当事者＝賛成者･反対者（für es）の立場に立ち，その意識なりを共有することは同一の関係に自分を置くことである。また，賛成者が反対者の意見に耳を傾け，反対者の立場から自分を見つめた上で賛成意見を陶冶していれば，対自的な登場人物への同化になる。この場合，賛成者･反対意見が，自分の「価値」観に合致する場合も，あくまでも当事者と意識を共有して

いる自分と観察者としての自分とは不同一である。このように，書き手は，賛成・反対に関わらず，自分の「価値」観から離れて，表象面で，登場人物の立場（「価値」観）に立つ観察者としての自分（同一）にもならなければならない。また同時に，この同一化された自分を自分の「価値」観を持って深層面で，登場人物を観察する自分と分割（＝不同一＝異化）する自分にもならなければならない。その上で，表層面でのこの同一化における登場人物の意識や行動の賛成・反対に関わって，深層面から視て，合致している自分と矛盾を感じる自分を突き放さなければならない。この作業の反復を新たな証拠・資料や意見を摂取・批判しながら続行し，自分の「価値」観を，演繹・帰納の思索の溶鉱炉に叩き込んで焼き直し，「価値」自由（Wertfreiheit）に真理を見つけてゆかなければならない。

例えば，マルクス・Kは，20ヤールのリンネル（a）と1着の上衣（b）とが交換されようとしている市場を想定し，aの「価値」がbの使用価値で表現される「価値」形態の内実を認識論的に明らかにする際に，上の同一・不同一の役割構造を使って，双方の使用価値a・bが「価値」に還元される経緯を，aがbという鏡＝「回り道」を迂回（久留間鮫造［K_{ur}・S-1］）して行う還元と捉え描写している。aの所有者Aとbの所有者Bが捨象され，商品語でこの描写が進んでいる。この商品語は，暗に物象である商品aの人格化としてのAの意識を表現したものである。だから，このaのbを通した迂回は，観察者マルクスが，登場人物Aの立場に同一化した上で，Aが異なった使用価値を有すbにaとの共通項＝「価値」を見いだす意識上の表層的経緯[8]を辿っていることになる。書き手マルクスは，完全に登場人物Aの意識とは不同一化した上で，深層に降りて，この「価値」への還元を，a・bを生産する具体的有用労働の抽象的人間労働（「価値」実体）への還元（第2の「回り道」）だ，とみなしている。

したがって，マルクスは，同一化・不同一化の手法を駆使して，「価値」を表象と深層に2分割し，表象の同一化レベルでは，未だに抽象的人間労働で規定されていない「価値」を置き，深層の不同一化レベルでは，既に抽象的人間労働で規定し終わった「価値」を置いていることになる。

マルクスは，この同一化・不同一化の手法を，剰余「価値」を即利潤とみなす商業資本家との同一化やそれを不同一化して剰余労働で規定する際に駆使している。また，商品物象化論や労働の「価値」形成労働であるか否かの判定など歴史認識に関わる分野で駆使している。

書き手＝観察者，被観察者の二者の役割構造は，基本的には被観察者Aと被観察者Bとの対立・協調関係やA・Bの構成する組織・社会，さらにはC，D，E…などの登場によっても変わらない。しかし，二者の役割構造の内，被観察者が個人・組織・社会・制度レベルで複雑な重層構造を持っている場合は，書き手＝観察者も，被観察者のそれぞれのレベルに応じて見方を変え，分析道具も変えなければならない場合もある。つまり，いつの時点でどこで，どの範囲で被観察対象が意識を持ち，行動したのかを観察者は時間論的空間論的に整理しながら分析する必要がある。「価値」観をもって，被観察者の複雑な重層構造を分析する場合には，特にそうである。

例えば，現在の日本社会における合成洗剤・遺伝子組み替え食品・輸入食品の問題となっている3商品の消費者行動について論じる場合には，この重層構造・複雑性を踏まえておかねばならない。個人レベルでは，それら全てに対して，想念・意識上は，賛成者もいれば反対者もいるし，保留者もいるし，その内のいくつかについての賛成者や反対者もいることになる。社会・組織レベルでは，それらが相互に影響を及ぼし合い，個人がメーカー・ディーラー組織の一員である時には，それら組織からの行動規制・強制も考えられる。そうすると，観察者も被観察者の分析自体に組織論と

いう分析用具を持つことを迫られる。事態の複雑性は，分析者同一化の視点も種々様々にしてくる。

上の3つの問題の商品とヒトの3つの選択肢の組み合わせは3×3＝9通りになる。意識と行動の関係について，行動が意識に合致しているヒトも矛盾しているヒトもいる。そこで，さらにこれら当事者の意識上の選択に基づく買う買わない(9)の2通りの購買行動を考慮すれば，9×2＝18通りの分類になる。さらに，これら消費者が3商品のメーカー・ディーラーとどのような利害関係を持っているか，その利害について，有利・不利に分ければ，さらに18×2＝36通りの分類になる。また，先述のように，有利な利害関係についても，メーカー・ディーラーの直接的従業員である場合や間接的取引先や企業城下町からの規制など多様である。

それらの意識上の選択についての社会・地域における多数派・少数派の区別や他のビジネス上の関係，洗濯機の自動の有無，さらにはマーケティング・ミックスにおける流通経路・価格・プロモーションや地域・学校の環境教育などによっても複雑に変化してくるであろう。仮説としては，おそらく，アンケートをとれば，意識上も行動上も，全てに賛成のヒトと全てに反対のヒトに大きく分かれることになるだろう。その相関をどう捉えるか。

上の36通りについて，周辺環境も加味して分析する場合，一定のシュミレーションを描いて，コトを単純化して分析し，後でそれらを総合し，複雑な事象に忠実になるように叙述しても良い。

このように，事象が複雑になればなるほど，書き手，被観察者の関係における同一・不同一や矛盾の弁えが重要になる。そこに，「価値」観を巡る緊張（Spannung）が走る。

他方の読み手（R）との間についても，同様の緊張がある。卒論の場合

は，読み手が，刊行しない場合，ゼミの指導教員や仲間と後輩などに限定されてくる。だから，この緊張も主として顔見知りの間にのみ緩慢に走ることになる。卒論は，一般大衆を読者とする「印刷物」と差出人・宛先を明示した「記録」との中間に位置づけられる[10]。

書き手は，本節の役割構造におけるこれらの対読者・対当事者との緊張を自覚した上で，序→結の構造を上向法で貫き，その筋道における被観察者＝当事者の社会関係の単純なものから複雑なものへの展開を描写してゆかなければならない。

本章では，書き手である自分（＝我）及び読者の立場に立った自分（＝我々）と論述に登場する企業（E）人—国家／自治体（S）公務員—消費者（P）とのヒト—ヒトの関係の中の役割構造を弁えながら，いかに論文を構想するか，構想力をどう磨くか，という問題について，抽象的なレベルで考えてきた。

そこで，我々は次に具体的な卒業論文などをどのように，展開してゆくのか，という問題について次章で考えてみよう。

第2章　叙　　述

具体的な小論文・論文・本などの叙述において，どのように第1章で論じた抽象論を活かしてゆくのか？本章は，そのことに答えてゆく。

第1節　小論文

小論文も，序→本文→結という流れを踏まなければならないのか？本節では，主としてそれに答えてゆきたい。

結論から言えば，高校・大学・大学院入試でも，入社試験でも，その流

れは重要である。小学校・中学校から国語の作文では，その流れについて指導すべきであろう。

小論文の執筆についての留意点は，(1)その流れを踏まえた構想力，(2)論旨一貫性＝論理，(3)表現力，(4)理解力，(5)個性（独創力＝オリジナリティー），(6)話題の理解範囲，(7)文字のキレイさ，などである。

つまり，次のようになる。

(1)　構想力＝論文の構造のこと＝序（起）・章（承）・章（承）・結（結）（序に当たる書き出しで、テーマや問題提起を明確にし，それを第1章で受け（従来の説の紹介でもよい），第2章で第1章をさらに受けたり，反論を唱えたりして，第3章か結論で自分の意見を明確にする。

(2)　論旨の一貫性＝論理（A＝B，B＝Cならば　A＝Cの3段論法や正・反・合の弁証法や演繹法・帰納法など）

(3)　表現力（語彙の豊富さ・的確さ・接続詞の上手な使い方・臨場感・リズム・迫力・説得力・語意の正確さ・書き出しとシメの的確さ［「全然…ない」「なぜなら…だからである」「もしも…ならば、…であろう」など］）

誤字・脱字・語意の勘違い・若者のおかしな日本語・間違った文法表現や敬語・「は」と「が」の違いなどに注意。原稿用紙の使いかた。

文章は簡潔なほうがよい。長くても，パターンを踏んだら分かりやすい。

(4)　理解力＝洞察力＝理解の深さ

(5)　できれば独創力＝オリジナリティーもしくは、従来の説の応用力＝改良

(6)　話題の理解範囲・どれだけカバーしているか。

上の1について，あるテーマに沿って，論文を纏めるには，KJ法もある。

これは，思いつく発想を，１発想：１カードに書いて，後で集めて，大きなテーマ・小さなテーマで分類し，相撲の土俵のような輪の中に入れて，それらの輪の相互関係・因果関係を探ってゆくものである。

小論文作成については，毎日１題テーマを決めて，例えば討論や時事問題の対象になっている地震とか国際交流とか自然保護とか捕鯨問題とかエイズとか人口問題とか健康問題とか「走れメロス」と作者の性格とか人間関係とかコミュニケーションの正確性とか日本文化の特殊性とか戦後50年とか戦争と平和の問題とかオゾンホールの脅威とか，どうしてNZは交通事故が多く死亡事故も人口比で日本の２倍なのかなどについて，400字に纏めてみることである。毎日書いている内に，400字で纏める力がつく。これは電話で要件を伝えたり，手紙を書いたり，企業で報告書を書いたりするときに必ず役立つ。

ある我がゼミ生は「全然…である」とか「というには…である」とか「…です。…である」調の複合とか，主語―述語の不照応とか小学生以下の表現力しかなかったが，春休みに何度も小論文とその添削を往復している内に，これらが「全然…でない」とか「というには…だからである」とか「…である。…である」調の統一とか主語―述語の照応とか小学生以上の表現力に直り，大学生の文章らしくなってきた。

小論文作成の訓練は，朝日新聞の論説か声などを読むことであり，上の表現力について，忙しくても１日のできごとのテーマをしぼって日誌を書いてみることである。急がば回れ，日誌は作文力を養う。

入社試験などの小論文作成に当たっては，上の構想力について，必ずあら筋・構想のメモ・下書き・キーワード・流れ図・漫画などを欄外などに書いてから始めることである。以下，具体的なテーマに沿った論述について，我々の模範を示してみよう。

＊小論文例：テーマ「いじめについて」

下書きメモ：

問題点

＊　日本の教育制度・先生の教育実習・社会制度・生徒の倫理感の不足

1.　NZでは，昔も今も一般的に子どものケンカに親が必ず口を出すが，昔の日本では出さない。悪い子をいいつけたら，日本ではスパイ・チクルとみなされるが，NZでは問題が分かったことで，いいつけ(＝密告)は勇気があるとみなされ，悪い子の意見もいいつけた子に分からないように聞いて，場合によってはクラス討論になるようである。教材より人間関係(rapport)重視。ただし，BursaryやSchool certificateに関しては，大学進学・奨学金貸与の利害が絡み，日本よりも心理面では陰湿な競争や日本と同様の民族排外主義的いじめあり。

効率重視だけでやるとグングン成績は伸びるが，大学までゆくと，または社会に出ると，人間のために勉強してきた，というベースがなく，人間性が欠如しているためにゆきづまり，ニヒルになって，結局効率性も落ちることになる。

2.　生徒―教材―先生（生徒―先生や生徒―生徒の人間的接触の欠如，管理教育）

競争社会・偏差値教育・記憶力主義―先生による生徒の管理教育

はみだしの除外・親：教育ママ

管理され抑圧されると内輪モメばかりし，本当に悪い抑圧者より，仲間が憎くなる。

解決

2について，日本の教育制度・管理教育のみなおし。1について，親が口を出さない社会常識の問い直し。

以上の内容を，「いじめについて」と題して，作文の練習をしていないヒトが書くと以下のように400字の２倍になる。

「(いじめについて，それが起こる社会背景と教育方針の歪みを探り出し，その解決の道を探してみたい。）日本では（職業・企業が社会的地位・評価の重大な決定基準になっており，)出身大学重視で採用する企業が多いために，エリート校受験競争が厳しくなり，その試験内容が記憶力重視であり，受験生の（ボランティア活動や）人間性を評価基準にしないため，偏差値教育・管理教育に陥り，親も先生もそのために教材重視の教育に偏るようになる。この管理教育や社会からの重圧は，生徒の間にストレスをもたらし，(ケージ飼いの鶏どうしのつつき合いのような)いじめを起こさせている。エリートコースからはみ出し，親や先生から評価されない生徒やエリートの中の悪いライバル意識の強い生徒が集団になり，そのパワーを，身体が小さかったり，少し他と変わっていたり，人がよかったりする少数もしくは一人の弱い生徒に向け，支配することによってストレスを解消しようとするわけである。このようにして起こるいじめはボヤの内に消さなければならないのに，日本では親がなかなか口を出さない。(先生どうしもいじめあっていて，どこまでいっても重箱型のいじめの世界)

この問題の一つの解決は，教材重視の教育からクラスの生徒間・生徒—先生間・先生間・親—生徒間・親—先生間などの人間関係の相互理解重視の教育へ転換すること，つまり魂が相手の身体に入って，自分が他人の身体を持ちその立場に立ったらどう思い考えるか，というところまでつきつめて，差別を克服してゆくようなコミュニケーション，リラックスし和やかな雰囲気をベースにおいた教材活用に転換することに求められる。また，子どものケンカに親が必ず口を出し正しく誘導することに求められる。」

このような，冗長な作文は，我々のように練習をしておくと以下のようにキレイに400字にまとまる。つまり，エッセンスだけ語るようになる。

「教育といじめ」

「この課題について，NZと日本の比較を通して考えてみよう。日本では出身大学重視の企業が多いために，エリート校受験競争が厳しくなる。また，受験生の人間性評価が低いために，偏差値教育・管理教育に陥り，親も先生もそのために教材重視の教育に偏るようになる。この管理教育や社会からの重圧は，生徒の間にストレスをもたらし，親や先生から評価されない特にストレスの強い生徒などの集団に，いじめによるその解消を方向づけている。また，このようないじめはボヤの内に消さなければならないのに，日本では親がなかなか口を出さない。

この問題の一つの解決は，教材重視の教育からクラスの生徒間・生徒—先生間・先生間・親—生徒間・親—先生間などの人間関係の相互理解重視の教育へ転換すること，差別を克服してゆくようなコミュニケーション，リラックスし和やかな雰囲気をベースにおいた教材活用に転換することに求められる。また，子供のケンカに親が必ず口を出し正しく誘導することに求められるのではないだろうか。」

その他，小論文は，臨場感をうながすリズム，説得力・迫力や次のようなことにも注意。つまり，表現の多様性を心がけ，同じ言葉の繰り返しは，できれば避ける。漢語・和語・英語のどの表現が的確か，端的にキーワードで表現すればどうなるか，など考える。例えば，「くやしさ」＝無念など，他のピッタリした言葉がひらめけば，それを使う。社会科学では，同一表現を使うほうが誤解の余地がなくなるが，入社試験の作文では多様性が重要。また，字句・表現内容の正確さを要求される社会科学では，これ，それなどの代名詞は，あいまいになる場合は避けるが，文学，エッセイでは

指示代名詞を使ったほうが良い。

また，無理な出題と体験などとのこじつけはできれば避ける。自分の体験を述べる場合は，体験の範囲内で，出題者の意を汲んで纏める。

「　　」などは，論文の場合は引用やいわゆる…の言などに限定されるが，小論文，特に作文・エッセイでは，そこまでは厳密に追究されない。

誤字脱字は，あまり気にせず，構想や内容重視。熟語などの漢字が分からないときはひらがななどでよろしい。

最後に，筆者がある中学生（陸上部所属）の作文（400字以内，30分）を指導し，完成した例とある大学生（留学研修代理店入社希望）の作文を挙げておこう。テーマは「一歩の差」と「海外留学」である。

1　出題テーマ「一歩の差」

2　思い出す自分の経験などのメモ

陸上100

99％の努力と１％のインスピレーション

運・不運

地雷

……

3　メモから選択：陸上100

4　陸上100について思い出すこと・キーワードのメモ

中体連・記録・目標・励み・練習・成果・努力・足の血豆……

5　構想のメモ

(1)　クラブ活動の様子

(2)　中体連までの努力

(3)　根性物語としての今後の人生の教訓

6　はじめと終わりの文句のメモ：「一歩」

（以上2～6には3分くらいは使ってもいい。）

7　書き始める

20字×20字

「一歩の差」

「一歩の差」と言えば，中体連の記録を思いだす。私は昨年の夏休みまで陸上部に所属しており，中学時代2年半，何回もの陸上大会に出場した。百メートルの選手だったので一秒，いやコンマ一秒が勝負であった。その短縮を目標に毎日練習に励んだ。

夏休み，中学生活最後の中体連直前の大会では十二秒三になった。その時，「本番では十一秒九だ」と心の中で叫んだ。この記録を目指して，残りわずかな日々を，足に血豆が出来るほど練習に打ち込んだ。だが，中体連では十二秒〇までの伸びに留まった。

走り終わって，記録を見たとき，「もう少しで十一秒台だったのに。」血豆さえなければ，と悔やんだ。これは「一歩の差」であった。それ以来，この「一歩の差」は，苦々しいけれども，思いだす度に，もっと早めに努力を積もう，という反省につながり，心の励みになった。これからも，「一歩」の短縮を目指し，向上心を持ち，努力し続けたい。

以上のように，たった400字の小論文にも，第１章で述べた構想力は活かせるし，また活かさなければならないのである。次に，入社試験小論文の「海外留学」を掲げておこう。

「海外留学の必要性：自立のための留学」

なぜ海外留学が必要なのか？現在の国際化社会では，相互理解し，自立するための手段として異文化間コミュニケーション能力・語学力が必要であり，その能力は、実際に問題意識を持ち，海外留学し生活して得ることができるからである。若いうちにこの能力を身につけ相互理解をうまくしないと国際的な衝突が起こり，平和が崩れてしまうこともある。

語学力については“留学＝外国語の修得”という方程式がある。８年も英語を勉強したのに話せない。そんな私たちが１年ばかりの留学で本当に話せるようになるのだろうか？Yesだ。日本での学習は机上でテストのために書くだけの一時しのぎのものだが，留学は海外の現場で外国語を一人で生活・研修しつつ体得することを意味する。留学は，生活上の言葉のコミュニケーション（discourse），Survival Englishを自分のものにさせる。

さらに，留学は生活文化を体得させると同時に自立のための自己表現能力も鍛える。日

本人は相手の気持ちを眼で察する優しい民族だが，海外では自己主張しないと誰も助けてくれない。海外留学には“留学＝異文化の理解＝自立”という方程式も隠されている。

自立について，コミュニケーションの拡張と自己への集中という点からは，海外へ行くことは世界観を広げさせ，自分を深め豊かにしてくれる。海外で全く考えの違う人たちとの出会いは人生観を変え，自己を成長・自立させる大きなチャンスや試練にもなる。

しかし，それが単なる一過性の旅行では効果半減である。関心のある国へ行き，現地の人と接する機会が多く現地の人と同じ生活ができる研修のほうが良い。だから，私も貴社のホームステイコースを選んだ。だが，1ヶ月弱の滞在であり，自分から進んで話をする生活に慣れ始めた頃に終わってしまった。

私の研修は，短期間なので好印象ばかり残ったが，長く滞在すればするほど契約社会や異文化生活の厳しい面に遭遇すると聞く。その深層まで知ってこそ相互理解の手段となるのだ。より確固とした自立を遂げるためには長期滞在，留学が必要不可欠である。

私は，これから先進国ばかりではなく契約社会が未成立の途上国にも目を向けたい。途

上国で生活すれば自分たち日本人は恵まれていることに気づくだろう。しかし，途上国の人々の方が日々を一生懸命に生きていて，とても充実していることも同時に分かるはずだ。経済的に豊かではなくても人の輪があるのだ。

日本人は単一民族に近く異文化間コミュニケーションは苦手だが，海外留学は，世界のサラダボールの中で，それを上達させる。また，語学力はもとより人生の幅と奥行きを広げさせ深め国際人を生む。若いうちのカルチャーショックは，日本人にオープン・マインドを持たせ，私たちを国家間・民際間の情報交流・相互理解へ，さらに平和へと導くのだ。

上の小論文は，第1段落が序に相当し，最終段落が結に相当する。

以上で小論文についての解説を終え，次節では第1章の具体例としての論文執筆に触れてみよう。

第2節　論文

具体的に卒論を書く際に，構想力をどのように発揮してゆくか？本節では，我々が，グリーンマーケティング論の内のグリーンプロシューマリズム論（「グリーンプロシューマリズムと分業」[S_{ai}・J-7]）を展開した場合を例にとって，そのことを説明してみたい。

グリーンプロシューマリズム論を展開するに当たって，我々は通常次の

ような項目に沿って作業を進める。

＊執筆順序

(1)　最も言いたいこと＝問題提起を自由にストーミング的に書いてみる。

(2)　キーワードを思いつくはしからメモする。

(3)　学説・資料・現場メモのサーベイと(2)との関連を追う。引用・参考文献表作成。

(4)　重要な点などを落書き・メモ書きし，図表示する。これらは，まとまらなくて良い。片っ端から書いておく（KJ法・ハブ型勉強法）。

(5)　構想＝論文の構造を(4)から連想し，(4)の言葉や(2)のキーワードを分類・リンクすることによって作成。構造について，イメージ図作成。

(6)　執筆→(1)を序や結に，(5)の並べ変え・編集に沿って，本文執筆，途中で(3)の内容次第で，注を作ったり，本文に入れたりする。

(7)　執筆内容のチェック。(1)上向のチェック。論理のもたつきに注意。場合によっては章の前後を入れ換える。(2)各章・節の文章量のバランスに注意。(3)章と章のツナギに注意。(4)役割構造上の同一・不同一が明確か否かチェック。

(1)　問題提起

環境ホルモンが特に96年以降，問題になりだしてから，消費者運動は，質的に変わってきたのではないか？ますます，有機農業研究会が言ってる，生産者と消費者の提携＝産消提携が大事になってる。食品だけでなく，衣住も入れて環境ホルモンを考え，それらの生産→流通→消費→廃棄→リサイクルの全体（LC）を考えねば。

(2)　キーワード

ダイオキシン・グリーンプロシューマリズム・産消混合型協同組合・社

会内分業・生産と消費の懸隔・環境行政・LCA と時間・未来労働現在化・労働価値説と分業・cost＝toil and trouble＝sacrifice・死労働＋生労働・技術と人間・複雑系・消費者運動・反公害運動・社会的物質代謝＝商品交換・自然的物質代謝・スミス—リカード—マルクス・メノナイト・日本有機農業研究会・グリーン文化／制度・身水気土不二・社会的責任＝無責任・消費から創造へ・教育／エコバンク／高齢者対策→グリーン社会創出・共同主観の存立構造・遺伝子組み替え食品・適性規模／適性価格

(3)　学説・資料

トフラー・A：プロシューマー『第三の波』，河野直践，多辺田，スミス・A：分業，上杉鷹山，イリイッチ，シュタイナー・ルドルフ

(4)　重要点の落書き

＊グリーンプロシューマリズムの定義[11]：生産活動・企画に積極的に参画して，環境を保全する営為を求める運動であり，従来のグリーンコンシューマリズムに生産活動への参画型の運動を注入・変革。

E：グリーンプロシューマリズムへの対応・等身大の技術＝スモールイズビューティフル・中小企業の存在意義・ダイレクトマーケティング・ジェンダーマーケティング

P-D-C-W-R：LC に責任・特定家庭用機器再商品化法案・リサイクル法・ISO14001・10C／4 C

S：バブル崩壊後の消費不況からグリーン（環境）経済政策を通した脱出を。社会資本・建物・製品・サービスを産業界に生産・流通・リサイクルさせてゆくような環境行政。グリーン調達・コンセンサス

未来志向で焼却炉・灰問題解決，上杉の開墾・錦鯉・紅花・材木

飢餓と飽食——平和貢献による景気回復・恐慌・戦争

P：プロシューマー・自給自足・共生・分業の問題点・国際分業。

消費／商品の本質的使用価値・付随的使用価値，分業による人間の抽象化と無責任・売買の経営体としての店舗運営・日用品生鮮食品配達販売業務に対応する組合員，脱環境ホルモン，工業協同組合，協同組合間協同，インターネットネットワークの経済性・サービス経済化との関係，家族労働，高齢化・失業者，貨幣物神崇拝からの解放，エコフェミニズム，創造型，エコバンク／金・モノ・法・情報流通・パッケージ

(5)　構想

第1章　分業の問題点→トフラー解説，第2章　プロシューマーリズム

第3章　プロシューマー型企業　第4章　プロシューマー型環境行政

(6)　執筆

第1章分業と第2章プロシューマーリズムとが抽象度の落差がありすぎて苦労。

分量の都合上，第3章・第4章は省略，将来展開。

第1章分業では，デユルケムの分業論や吉田民人氏の分業と所有論のサーベイ，それにイリッチのシャドウワーク論のサーベイとそれらの連関をつけるのに苦労。このことは，今後の課題にもなった。特に，吉田民人氏のものは優れており，含蓄まで理解できなかった。

第2章では，出版されたばかりの河野直践氏の本や具体的なプロシューマリズムの運動に引きつけられ過ぎて，あまり理論的展開をしなかった。これが先ほどの落差を生むことになった。第2章では，グリーン調達の必要性から協同組合間協同へ，という箇所は我ながら説得力があった。

(7)　執筆内容のチェック。

執筆しながら，矛盾を感じた(6)のような内容を出来るだけ修正。筆が勢いづいて，注などは支離滅裂になっているところがあり，修正。構造上・内容上，注に移した条りも多々あった[12]。

以上(1)〜(7)を経て出来上がったのが「グリーンプロシューマリズムと分業」[S_{ai}・J-7] である。これら(1)〜(7)の作業，注・文献表作成作業などの分かり易い説明は，序でも触れたように，分かり易い末尾の資料：橋川玄武「卒論の書き方」を是非参照していただきたい。

このようにして出来上がる論文が蓄積されると，それらを基に著作を執筆することになる。次節では，そのことに触れておこう。

第3節　本

本の構造・上向の構想・役割構造は，どのようになるべきか？論文をどのように編集すべきか？

本の構造も論文の構造と原理は同じである。ただ，大きな体系をつくり，論点の重複を避けること，その点で構想力を大きくした編集能力が問われることが違う。また，まえがき・あとがきや目次を付け，本全体の構想を明らかにしておくことも違う。さらに，抽象度や分類次第では第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ編などの中分類を行い，それぞれに，はじめに・おわりにを付けること，文献表を末尾に集めることも違ってくる。

本節では，『グリーンプロシューマリズム』の編集に例をとって，このことを考えてみたい。

蓄積した論文を本にする場合，最初から著作を編むつもりで，グランドデザインをもって論文を執筆していれば，その編集は容易である。そうでない場合は，上向の構造に落差が生まれたり，先ほどの鋸の刃が深く成りすぎたりしがちなので，本にできる論文を選び，論文を修正・加筆したり，新しく論文を執筆しなければならなくなる。我々の編集は，この手こずるほうである。

具体的には，まず今まで発表した論文のタイトルを時間順に挙げ，全体

構想の中で，そのタイトルを変更し，上向法に沿って,章のみならず，節も分類し，内容順に論文を並び変えるところ，さらに補完に必要な章の論文内容のアウトラインを述べるところまでの作業が要求される。これを，以下我々は，1.　大きな体系づくり，2.　論文編集の順に紹介しておきたい。

＊『グリーンプロシューマリズム』の編集

1.　大きな体系づくり：キーワードを拾うところから

＊まえがき＝本のテーマ

生産と消費の懸隔，私的所有を媒介にしたこの社会的距離＝社会内分業のもたらす矛盾，特に石油化学文明の巨大技術と結びついて巨大な生産力となった現在の社会内分業の矛盾をどう解決するのか？

経済的な地球環境保全型の持続的発展は可能であろうか？

協同組合は，どのようにグリーンプロシューマリズム対応のネットワークを築くか？

＊あとがき＝一つの解決がグリーンプロシューマリズム

グリーンプロシューマーリズムは，E－S－P相互のグレイなベクトルのグリーンなベクトルへの転換を前提にする。現実的にはこれら協同組合や企業（E）が，脱環境ホルモン型投入一産出一貫体制から視て，グリーンプロシューマーリズムと相互に響き合うことを前提にする。従来の社会内分業を克服したダイレクトマーケティングとしての協同組合間協同や工業生産協同組合の育成こそが，グリーンプロシューマーリズムを可能にする。

分業に基づく所有の占有への転化，未来世代の環境負荷削減労働の現在化のためには，コンシューマーが産＝消混合型協同組合を陣頭指揮し，グリーンな工業生産が必要になる。奪われんとする未来を奪還

しようではないか。

＊キーワード：グリーンプロシューマリズム，グリーンマーケティング・コミュニケ-ション，国際競争とグリーン連鎖，CE（Corporate Environmentalism），未来労働現在化，人民（農民＋市民）社会構築，E企業－S国家－P消費者，‘特急3D（Decoration＝Dirty＋Diversification＋Danger）から鈍行3S（Simplicity＝Serine＋Small＋Safety）へ’，‘4R（Refuse/Recycle/Reuse/Reduce）から5P（produce[alternatives]/Precycle/Preserve/Purify/Poverty へ’，グリーンLC，インバースマニュファクチュアリング，3S（時間［Span］空間［Space］種間［Species］）軸，持続可能性S（Sustainability）と諸個人の生活の自由L（Liberty）との調和，所有から占有へ，グリーン「価値」・グリーンプライス・未来労働現在化・過程的グリーン4P（producing, pricing, placing, promoting）・相対的グリーンマーケットイン vs. プロダクトアウト・グリーンメッセージ（エコラベル・パッケージ・広告コピー/イラスト/CF・人的販売・狭義の販売促進）＝グリーンリビングマーケティングコミュニケーション

1．論文編集

(1) 論文レビュー

A．時間順の論文タイトル

1．グリーンリビングマーケティング（『商経論叢』第38-4）

2．グリーンプロシューマリズムと分業（『商経論叢』第39-3）

3．ISO14001とグリーンマーケティングコミュニケーションII（『産業経営研究所・所報』第31号）

B．内容順の論文タイトル

1．グリーンプロシューマリズムと分業

2．グリーンリビングマーケティング

（追加）プロシューマー型企業

3．ISO14001とグリーンマーケティング・コミュニケーションII

4．（追加）プロシューマー型環境行政

(2) 編集：Bの内容レビュー

第1章　分業とその超克

第1節　生産と消費の分離

1　流通と私的所有

2　流通と占有

第2節　生産＝消費者

1　生産＝消費者型協同組合

2　グリーンリビングネットワーク組織

第2章　グリーンリビングマーケティング

第1節　経済発展とグレイマーケティング

1　自然収奪

2　グレイな消費者行動

第2節　持続的経済発展とグリーンマーケティング

1　自然保全

2　グリーンコンシューマリズム

第3節　外部経済復元とグリーンリビングマーケティング

1　自然復元

2　グリーンリビングコンシューマリズム

第3章　ISO14001

第1節　システム構築

第2節　認証取得の意義と評価

第3節　九州地区の取得事例（続）

第4章　プロシューマー型環境行政

有機農産物の認証制度

ダイオキシン対策　etc.

以上のように，1．大きな体系づくり，2．論文編集の順に作業を進めると，新たに執筆し補足しなければならない章（第4章）や分業論の脆弱性やグリーンプロシューマリズムの事例不足など穴埋めしなければならない箇所が明確になってくる。

その欠を重要な項目順に並べ，補完してゆくために，新しい章を叙述し，それをはめ込むので，再びまえがき・あとがき・キーワードを参考にした上向のアウトライン（1．体系）を調整する，という反復作業を行わなければならない。アウトラインは，描いては消し，消しては描いてゆかなければならない。

その崩壊・創造の反復は「孤独の営み」であり，この孤独を超えさせ，疲労した肉体を支えるのは，情熱であり，使命感・正義感・執念である。ときには，それに名誉欲や職業としての自覚が付け足される。

結

グリーンマーケティング論は，グレイで地球環境破壊型のマーケティングを批判しつつ，その保全型でグリーンなマーケティングの必要性がクリアーに展開されなければならない。そのためには，卒論・修論＝論文一般にも当てはまるように，抽象・一般から具体・個別へと上向する序（Opening）→本文（Body）→結（Closing）の骨組み＝主流をしっかりとおさえ，

伏流は注に入れ，序の問題提起を結で明解に解決して見せること，このように，筋の一本通った構成・編集をすることが求められている。

また，グレイを経済発展のためには当然だと思っている経営者やそれに対して持続的発展のためにもグリーンマーケティングが必要だと思っている経営者など叙述舞台の当事者とそれに観察者として肉薄する自己＝書き手と読者の三者の役割をそれぞれの意識・認識の同一・不同一や一致・矛盾の重層構造を整理しながら，最終的には読者の共感を呼ぶように叙述しなければならない。

卒業論文は，4年間の集大成であり，ゼミの仲間と議論し遊び，学んだコトを「一人硯に向かいて」綴り，自己表現した情報の結晶である。それに向かわせるのが，君たちの若い情熱・正義感である。筆者が感動したコピーに，JR九州の吊り広告の「列車は，ヒトやモノだけではなく，勇気や愛を運んでいる」という内容のコピーがある。卒論も，君たちの情熱を運ぶキャリアーである。

本ノートが，これから卒論・修論を書こうとする読者の皆さんの参考になれば幸いである。

注

(1) 齋藤ゼミで，我々は次のような檄を飛ばしている。

「ゼミ生よ，共通テーマとして，地球環境・地域環境を守る企業行動：グリーンマーケティングを学びながら，自分の卒業論文のテーマを決めよ。

ゼミをなれあいの香椎遊園地ゼミにしてはならない。厳しい修行の永平寺ゼミにしなくてはならない。若くして学ばずば人生にくじけ，学べばくじけず。ゼミ生よ，苦行僧となって，道を拓け，修行を積み，卒業論文を準備せよ。ゼミは玄米のごとく，入ゼミ放棄やゼミ脱落は白米のごとし。無農薬玄米は，噛むのに手間・暇がかかるが，滋養が身につき，繊維質なので太く立派なウンコ（成果＝卒業論文）

が出てきて，快感を伴い，論文の玄人になれる。

ゼミ生は，夏休みまでに卒業論文のテーマを決め，夏休みにこれぞという1冊を10回読んできて，夏休み明けに齋藤の審査を受ける。秋以降，関連文献・資料収集と整理・読破・レジメ作成に当たる。この過酷なレースに残るもののみが4単位を獲得できる。ゼミ生に，学園から外へ出ず温室で育った私が残し与えてあげられるものは，論文を書くための技（わざ）だけである。

ところで，齋藤ゼミ生は足元の私生活においても，エコロジストとして，エゴ・エコバランスの理論と実践をめざし，無農薬野菜の宅配や引き売りを行っている会や個人を調査したり，啓蒙活動などのグリーンイベント・マーケティングを手伝うことになる。…」

(2) 橋川ガイドは，ゼミ生向けのガイドになっており，ゼミの指導教員に敬語を使用している点などについては，「乾いた文章」（[F_{ur}・T-1]p.30）になっていない点を斟酌願いたい。また，ゼミのテーマがグリーンマーケティングに限定されている点も同様に斟酌願いたい。

(3) 論文は，謎解きではない。本文図表1-2-1でも示したように，序で問題提起し，問題の所在を明らかにし，その解決＝結論へ向かって，まっしぐらに論理構成をしていかなければならない。この点，エッセイや小説・推理小説では，謎解きでいいし，問題も不明でいいし，論理が道草をくっても，それ自体が面白いものになる。文学作品としては，論理よりも心理描写・レトリックの上手さ・手法の斬新さ・美文かどうか，が問題になる。

小説などでは，衝撃的な事件やなにげない登場人物の日常生活などから始まって，徐々に叙述（述語）を通して，小出しにその事件や登場人物（主語）の輪郭・関係性が明らかになり，面白くなってくる。最後まで，事件の意味や登場人物の全体像は，分からなくても良い。主語が述語によって規定される大筋は論文と同じであるが，論文のほうは，もたつかず単刀直入に真理を求め，結論へ到らねばならず，レトリックなどよりも論理・叙述の厳密さが問題になる。

(4) 序→本文→結の三部構成については野口（[N_{og}・Y-2] pp.103-4）及び澤田（[S_{aw}・A-1] p.104）参照。

(5) この下向＝下降法を使って，高須賀義博氏は，マルクス価値論における（労働→「価値」→）商品→貨幣（→価格）→（剰余労働→剰余「価値」→利潤）資本（→競争→生産価格→市場生産価格→市場価格）への上向的発展をひっくり返し，資本／市場価格→競争→市場生産価格→（恐慌・景気循環）→生産価格→労働へ降りようとした。ここで，氏の下降において，生産価格→労働の間に「価値」が入らないのは，氏が総社会的平均的労働量と総生産価格，及び総剰余労働→総利潤量という量的な課題に集中し，商品所有者の認識・意識の問題を捨象したこと，及び思弁的恣意的な操作を拒否したためである。

(6) サーベイ論文では，批判・紹介対象の論者$_1$の意見と観察者$_2$＝批判者としての自分

の意見を峻別し，適合・矛盾点を明確にしなければならない。このことは，論者$_1$＝観察者$_1$を観察する自己＝観察者$_2$がいることを踏まえ，この重層構造を明確にすることを課題にしていることになる。

(7) ハブ型生活態度とは，自分の論文のテーマ，例えばグリーンマーケティングなどをハブ（＝自転車の車軸）にして，生活を通して得られる種々雑多な情報（＝自転車が進む通路・風景）を，そのテーマ＝ハブとの関連性の有無でスクリーニングしメモ（＝自転車の車輪・タイヤ）などをとったり，関連性有りの場合の関連（＝スポーク）についてのイメージ図を描いておいたり，自分だけの眠れぬ夜の時間などにそのことを考えてみるような生活態度（＝自転車の漕ぎ方）のことである。

その対語がレゴ型生活態度であり，それは知識をただただきちょうめんに四角ばって積み上げ，その上に屋根をつけ，こんなに高くなったと威張っているようなガリ勉型の生活態度である。

大学では，優の数・単位数で勉学特待生が選ばれるが，彼／彼女らの全てがハブ型生活態度を持っているわけではなく，レゴ型生活態度の面のほうが強い傾向にある。優や単位をハブ＝テーマに結び付けて捉えていないのは残念である。

(8) このように，「価値」形態の「回り道」の表層的経緯を解明するに当たっては，リンネル所有者Aという「当事主体の見地」(für es) を認識論的に捉えた廣松渉氏の業績（[H_{ir}・W-1] pp.130-8）に負うところが大きい。氏は，リンネル所有者Aと上衣所有者Bという当事者(für es)の認識に立った観察者(Beobachter)＝書き手(für uns) について，その für uns を当事者が即自的に立った場合の対他的 für uns と対自的に相手から自分＝当事者を認識させている場合の für uns に分割し，その反照としての同時的対自的な，対自対他をも説明し，対他—対自＝対自—対他 (p.143) の4ベクトルを，四肢的存立構造と表現している。精神の現象ベクトルを手足の動きになぞらえているこの技法は，千手菩薩像などを彷彿とさせる。氏は，この四肢的存立構造論によって，我々が本文で解説しているような「回り道」と「価値」の抽象を解明したのである。

ただ，我々は，氏が歴史論理説的にリンネル所有者A・上衣所有者Bを単純小商品生産者（余剰を市場に持ってゆく農村の織元［大塚久雄］のような自給的生産者）を措定し，この交換当事主体が「価値」実体＝抽象的人間労働を認識可能である，とみなしている点は，全面的には賛成できない。その条りは，こうである。

「Aは対自的には具体的主体であるとはいえ，Bに対して対他的には抽象的人間であり，相手の生産物上衣が自己の生産物リンネルに等置されたということは，相手Bにとって自分Aの生産物が抽象的人間労働の体化物として対他的に措定されているという事態にあること，このことがAにとって対自化される」([H_{ir}・W-1] p.144)

この条りにおいて，氏は明らかにマルクスの「回り道」解釈で，マルクスも，Aが双方の生産物を抽象的人間労働に還元し，それを認識している，と考えている，と

いう解釈をとっているように思われる。ところが，次の商品物神崇拝についての条りのように氏は，マルクスはAがそれを認識出来ない，と考えている，という矛盾する解釈もとっている。

「マルクスとしては…「人々は，交換において，彼らの異種の生産物どうしを価値として等置することによって，彼らの異種の労働を人間労働として等置する」と主張する。そして…「人々はそのことを知らない。だが，彼らはそれをおこなう」と書いている」（[H_{ir}・W-1] p.207）

この点について，我々は本文では「価値」レベルでは，Aが認識可能，労働レベルでは不可能，という考え方をして，「価値」を「価値」$_1$と「価値」$_2$に分割した。

ところが，氏は「価値としての等置」も「自覚的（für sich）な事柄ではない筈である」（[H_{ir}・W-1] p.207）と解釈している。我々は，この解釈を「「価値」$_2$としての等置」も「自覚的（für sich）な事柄ではない」と分析したい。

実は，筆者もこの労働が見える見えない，という論点については30年足らず動揺している。つまり，賃金労働者が自己労働を資本（剰余「価値」）の生産過程で対象化し，その労働生産物＝商品を流通（交換）過程＝市場で買い戻す際に，その市場現場で労働「価値」を意識しているかどうかについて動揺している。現時点で，筆者は，その市場現場では，賃金労働者も主婦も一般的な購買者も価格や「価値」$_1$しか意識せず，そのより安く買おうとするその修羅場から遠ざかって初めて冷静に，「価値」$_2$を意識しえるものだ，と考えている。それは，自己労働に基づく所有が強く意識されるのは，法律的な処分・占有・収益権が闘わされる民法・商法上の裁判や労働争議の現場など，市場から少し離れた市民社会の現場であってみたり，労働A—賃金G—商品Wを認識し，階級意識を持ち，剰余価値の生産過程における搾取や流通過程における収奪などを認識できる冷静な場である，と考えている。

(9) 意識と実践のかい離や実践レベルにおける使用価値実践・価値実践については，仲尾［N_{ak}・M-1］参照。

(10) 卒論の印刷物としての出版社を通した刊行では，筆者が知る限り横浜市大の斎藤毅憲ゼミが有名であり，長崎県立大学の安部文彦ゼミ（[A_{be}・F-1]）なども公刊しており，読者が限定的一般大衆になっている。

なお，本文の「印刷物・スピーチ・記録・会話」の4種類の情報伝達について，井上氏（[I_{no}・H-1]）は次頁の表(10)のように，記録の有無・複製の有無で分類した。

(11) 本文の定義のように，グリーンプロシューマリズムは，消費者の側からの生産者への接近を主としている。これに対して，環境や健康に悪いモノ・サービスを消費者に提供せず，それらに良いグリーンなモノ・サービスを提供し，かつ自ら消費する生産者側からの貢献をグリーンコンデューサリズム（Conducerism consumer＋producerism）と呼んではどうだろうか。このように考えると生産と消費を越え，かつ時間・種・空間（3S）を越えて生きる生活者＝living 視点の重要性（田原氏）が分かってくる。

表(10)　4種類の情報伝達方式

			記録原理	
			記録される情報	記録されない情報
			○記録されることによって情報価値が発生し，社会的に定着する。 ○情報にフォーマルな性質を付与する機能を持つ。	○記録されないからこそ発生する。 ○ジェスチャーのような身体運動が情報伝達に際し，補助的役目を果たす。 ○同一の場所で同時に起こり臨場感をともなう。 ○インフォーマルな情報流通。
複製原理	複製される情報	○複製技術を前提とした不特定多数向けの一方的コミュニケーション。 ○情報をパブリックなものに変える性質がある。	A 印刷物	B スピーチ
	複製されない情報	○個人，法人を問わず伝達には常に特定の相手がいる。必ず宛名がかかれている。 ○情報をプライベートなものに保つ性質がある。	C 記録	D 会話

出所：［I_{no}・H-1］p.112

(12)　この注への移動が，卒論草稿の点検では，一番眼につく必要性である。それは，上向法や大骨の構想及び抽象能力＝分類能力が未熟だからであり，時間不足のせいである。その次に眼につくのが，同じ理由で，章の入れ替えの必要性・各章間の繋ぎの必要性・章の序・結に当たるものの必要性・結をスッキリさせる必要性（本文で語られていない内容は移動・除去）序では問題提起（各章の内容を，もし序で述べるとしたら各章の関連性を）などである。

また，熟語や学術用語を知らず，使い慣れていないために，キーワード・簡略／簡潔な表現ができておらず，スカスカの冗長な文章になっているのも眼に付く。

枝葉末節になるが，文体の不統一・主―述の不統一・盗作／ひょうせつなども眼につく。盗作は厳禁，引用符「　」引用ページ・引用文献（著作者・書名・出版社・出版年度の順）の明示はしっかり。時間不足にならないよう，卒論執筆のスケジュー

ルをPERTのなかのCPMなどでばっちり，立てておこう。

このタイムスケジュールと関わって，卒論は，長年研究し論文執筆の訓練を受けてきた指導教授に訂正の朱を入れてもらい，修正してゆくことが必要であり，その反復に十分時間を割くことが必要である。筆者は，無教会派クリスチャンに共鳴するものである。しかし，無教会であろうと，いずこかで集い，語らい，批判し合わなければ，信仰や人生観は深まらない。同様に，卒論も自分一人で書き放していては上達しない。

ここで，以上のような卒論執筆上の注意点を列挙しておこう。

図表(10)　卒論執筆上の注意点

1．ストーリーをスッキリ（収斂）
　(1) 序では問題提起
　(2) 各章の繋ぎを
　(3) 各章の中序・中結，各節の小序・小結相当の条りを
　(4) 結をスッキリ
　(5) 枝葉（拡散）は注へ
　(6) スッキリしなければ章を入れ替え
　(7) キーワードでキラキラ
　(8) 章・節・論文のタイトルはエッセンスで短く
2．文章をスッキリ
　(1) 文体統一
　(2) 主語—述語の照応
　(3) 「…が（＝しかし or 前置き？），…(*1)」を避けよ
　(4) 長文を避けよ(*2)
　(5) 引用符・引用文献明示・資料出所明示で盗作防止
　(6) 引用は短く，簡潔に
　(7) 改行・接続詞を工夫
　(8) テクニカルタームを使いこなせ
　(9) 語義を明確に（用語辞典と睨みっこ）
　(10) アラビア数字は2つ以上連続は半角で
　(11) 文献は著作者・書名・出版社・出版年度の順で
3．勉学態度
　(1) ハブ型勉強・「焦点深度(*3)」を深く・好感度人間に
　(2) カードとメモはこまめに
　(3) 仲間と討論
　(4) タイムスケジュールばっちり
　(5) 草稿を書いて，先生から朱をもらえ
　(6) 冷却期間（走る筆をチェック）を
　(7) 「権威を引用する(*4)」な
　(8) フィールドワークに忠実に(*5)

(*1) [N_{og}・Y-2] pp.126-7　(*2) [U_{no}・Y-1] pp.86-8
(*3) [S_{ug}・S-1] p.103　(*4) [U_{no}・Y-1] p.84
(*5) [E_{me}・R-1_t]

引用・参考文献

[A_{be}・F-1] 安部文彦「「卒業論文集」はゼミ生の知的生産物」『HOME ECONOMICA』vol.14，アコム経済研究所，1997年10月。

[D_{oh}・F-1] 童門冬二『上杉鷹山』上・下，学陽書房，1983年。

[D_{ur}・G-1] Durkheim Emile, *Division of Labor in Society*, Free, 1933（仏語原典195年：田原音和訳『社会分業論』青木書店，1971年）.

[E_{ki}・P-1_o] Ekins Paul edi., *The Living Economy*, Routledge & Kegan Paul, 1986（[E_{ki}・P-1_t] 石見尚，中村尚司他訳『生命系の経済学』御茶の水書房，1987年）.

[E_{ki}・P-1_o] Ekins Paul, *Green Economics*, Anchor Books, 1992.

[E_{ls}・C-1_o] Elstob C.M., "Information, Meaning and Knowledge," Trappl R. et al, *Progress in Cybernetics and Systems Research*, Vol. 7, 1980（[E_{ls}・C-1_t] 齋藤實男訳「情報・意味・知識」九州産業大学『商経論叢・第29巻第4号，1989年）.

[E_{me}・R-1_t] Emerson R. and others（佐藤郁哉ほか訳）『方法としてのフィールドノート』新曜社，1998年。

[F_{ur}・T-1] 古郡廷治『論文・レポートの文章作法』有斐閣新書，1992年。

[G_{ib}・J-1_t] Gibaldi Joseph（原田敬一 訳編）『MLA 英語論文の手引（第4版）』北星堂書店，1998年。

[H_{ag}・Y-1] 芳賀矢一ほか『作文講和及び文範』講談社文庫，1993年。

[H_{ir}・W-1] 廣松渉『資本論の哲学』現代評論社，1974年。

[H_{ir}・W-1] 廣松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房，1974年。

[H_{ir}・W-1] 廣松渉『存在と意味』岩波書店，1982年。

[H_{os}・H-1] 保坂弘司『レポート・小論文・卒論の書き方』講談社文庫，1978年。

[I_{il}・I-2] Illich Ivan, *Shadow Work*, 1981（玉野井芳郎/栗原訳『シャドウ・ワーク』岩波書店，1982年）.

[I_{no}・H-1] 井上如『情報の読み方』日経新書，1971年。

[K_{aw}・J-1_s] 川喜田二郎『KJ 法』中公新書，1987年。

[K_{oh}・N-1] 河野直践『協同組合の時代』日本経済評論社，1994年。

[K_{oh}・N-2] 河野直践『産消混合型協同組合』日本経済評論社，1998年。

[K_{un}・T-1] 国狭武己・齋藤實男「ISO14000s」九州産業大学『産業経営研究所報』第30号，1998年3月。

[K_{un}・T-2] 国狭武己・齋藤實男「ISO14000s」九州産業大学『産業経営研究所報』第31号，1999年3月。

[K_{ur}・S-1] 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店，1957年。

[M_{arx}-1] Marx K., *Das Kapital- erster Band,* Band 23 der Werke von Marx und Engels, Dietz Verlag Berlin 1969.

[M_{at}・S-1] 松岡正剛『情報の歴史』NTT 出版，1990年。

[N_{ak}・M-1] 中尾訓生『資本主義社会の再生産と人権概念』晃洋書房，1993年。
[N_{og}・Y-1] 野口悠紀雄『「超」整理法』中公新書，1993年。
[N_{og}・Y-2] 野口悠紀雄『「超」勉強法』講談社，1995年。
[S_{ai}・J-1] 齋藤實男『グリーン・マーケティング』同文舘，1993年。
[S_{ai}・J-2] 齋藤實男『情報＝人間＝市場』晃洋書房，1993年。
[S_{ai}・J-3] 齋藤實男『グリーンマーケティングII』同文舘，1997年。
[S_{ai}・J-4_o] Saitoh Jitsuo, "Effective Use and Misuses of P Information", *Use and Misuses of Office Automation,* Kyushu Sangyo University Report, 1993（[S_{ai}・J-4_t] 齋藤實男「P情報の有用と誤用」九州産業大学『経営学論集』第4巻第1号，1993年7月。
[Sai・J-5] 齋藤實男「商品学の基礎理論：商品論における「価値」」九州産業大学『商経論叢』第37巻第2号，1996年9月。
[S_{ai}・J-6] 齋藤實男「「グリーン」の時代の協同組合とは：「グリーンプロシューマリズム」とネットワーク」『協同組合経営研究月報』No.538，1998年7月。
[S_{ai}・J-7] 齋藤實男「グリーンプロシューマリズムと分業」九州産業大学『商経論叢』第39巻第3号，1998年11月。
[S_{ai}・J-1] 斎藤毅憲編著『革新する経営学』同文舘，1995年。
[S_{aw}・A-1] 澤田昭夫『論文の書き方』講談社文庫，1977年。
[S_{mi}・A-1] Smith A., *An Inquiry into the Nature and Cause of the Wealth of Nations,* ed. Cannan E.,The University of Chicago Press, 1976.
[S_{te}・R-1_o] Steiner Rudolf, *Geisteswissenschaftliche grundlagen zum Gedeihen der Landwirtschaft : Landwirtschaftlicher Kursus,* Rudolf Steiner-Nachlass verwaltung, 1963（[S_{te}・R-1_o] 新田義之監・市村温司訳『農業講座』人智出版，1987年）.
[S_{ug}・S-1] 杉原四郎ほか著『研究レポートのすすめ』有斐閣新書，1979年。
[T_{ab}・M-2] 多辺田政弘『コモンズの経済学』学陽書房，1990年。
[T_{ak}・Y-2] 高須賀義博『鉄と小麦の資本主義』世界書院，1991年。
[T_{of}・A-1] Tofler Alvin, *The Third Wave,* William Morrow & Co., 1980（徳山二郎監訳『第三の波』日本放送出版協会，1980年）.
[U_{no}・K-1] 宇野弘蔵『著作集』第1巻，岩波書店，1973年。
[U_{no}・Y-1] 宇野義方/日高晋ほか著『短文・小論文の書き方』有斐閣新書，1978年。
[Y_{am}・N-1] 山川典宏『経営情報学』中央経済社，1993年。
[Y_{os}・T-1] 吉田民人『主体性と所有構造の理論』東大出版，1991年。

資料：「卒業論文の書き方～職人芸としての卒業論文～」

橋　川　玄　武

はじめに

卒業論文は，大学生活4年間の集大成として，全身全霊をかけて取り組め，というのが斎藤ゼミナールの基本姿勢である。従って，本ゼミナールに所属する以上，その秘めたる動機が友達づくりであろうがゼミ旅行であろうが，あるいは就職に備えてであろうが，徹底的に卒業論文の指導はなされる。

卒論に限らず論文は，基本的なルールを守ることによって初めて論文たりうる。従って，いかに素晴らしいことを述べていたとしても，そのルールに乗っ取って書かれたものでないかぎり，こと，論文としては意味をなさない。

本紙上では，このような卒論を書く上での基本的なルールを述べたいと思う。

1.　卒論の書き方

ここでは，卒業論文を書く上で必要とされる，具体的ルールについて述べる。

(1)　起承承結

本節では，卒論の骨格となる起承承結について述べる。

その昔，作文を書くときには“起承転結”と習ったものだが，卒論に起

承転結は当てはめられない。卒論においてその骨格となるのは“起承承結”である。起で問題を提起し，承で問題を受け，次の承で更に問題を掘り下げ，結で問題の結論を述べる。起承転結の転にあたる部分は，注に入れる。

骨格は以上の通りであるが，これら起承承結をただ漠然と書き述べていってはならない。次節では，章・節の書き出しについて述べる。

(2)　章・節の書き出し

本節では，章と説について，どのように書き始めればよいのかを述べる。

各章，各節の書き出しは，卒論において非常に重要なポイントの一つである。まず，各章の冒頭では，問題提起をし，本章で何を述べるのかを簡潔に述べなければならない。また，第1章以降では，前章からの繋ぎと本章での内容を述べることが重要となる。

各節の冒頭でも基本的には同様で，前節からの繋ぎと本節の簡潔な内容を，まず，明白に記さねばならない。

以上述べたような手法では，小説などと違い，読む前に種を明かしてしまうかのようなつまらなさを最初は感じるかもしれない。しかし，それは己が卒論を書いている，ということを自覚すれば，次第に慣れてくるだろう。

次に，書き出しと同様に重要な繋ぎについて述べる。

(3)　章・節の繋ぎ

本節では，文章の繋ぎ，もっと具体的に言うと，章と節，節と節，章と章の繋ぎについて述べる。

前に述べた起章章結の骨格に沿って述べられることになる卒論は，意味内容的にいくつかのグループに分けられる。それらは“章”あるいは“節”

に分けられる。一般例を記すと，以下のようになる。

序
第1章
　第1節
　第2節
　第3節
第2章
　第1節
　第2節
　第3節
第3章
　第1節
　第2節
　第3節
結
注
参考文献・ビデオ等一覧

前節で述べたように，各章・節の冒頭では，必ず述べる内容を簡潔に記さねばならないが，各章・節の末尾では，次章・次節に向けての繋ぎが重要となる。

繋ぎには大きく分けて2種類ある。一つは，意味内容的な繋がりとして，その章・節の結にあたるものである。もう一つは，意味内容的に次章・次節との連結を明らかにするための文章である。結論と繋ぎは，表裏一体のものであるから，その内容が解離していてはならない。特に章末では，本章での結論・総括と，次章への繋ぎを怠ってはならない。

従って，章と節，節と節，節と次章，章と章という流れは，抽象から具体へ（一般から個別へ）という大きな流れに沿って，無理なく流れていくように熟考しなければならないのである。

次に，注釈のつけ方について述べる。

(4)　注釈のつけ方

本節では，起章転結の“転”にあたる部分，注釈について具体的に説明する。

文章を書いていると，主流から外れる支流とも言うべき補足，つまり，専門的で説明の補足が必要なときや，あればそれに越したことはないような情報が必ず現れる。それらを技術的にさばく手段として注釈が用いられる。例えば，以下のような用い方をする。

斎藤ゼミナールでは，非常に厳しい論文指導を初め，各種の企業・団体訪問(1)公には未遂と終わった公開討論会等(2)，充実したゼミナール活動を行なっている。その反面，ゼミ旅行の回数は，未確認ではあるが全ゼミ中最多の7～8回(3)を記録している。

注

(1)　企業では，NEC，ベスト電気本店，ヤオハンジャパン，アジアコンピューター，しゃぼん玉石鹸，日産苅田工場，マツダなど。生協では，Fコープ，グリーンコープなど。また，経団連，福岡市役所，北九州市役所，沖縄県庁なども訪問した。

(2)　細川内閣時に問題となった米の部分自由化を受けて，「今，米を問う」と題した7時間に及ぶ公開討論会を企画したが，残念ながら内輪でしかできなかった。ゼミ内で客人一人を交えて，7時間の討論会を行なった。

(3)　いわゆるコンパは，玄海灘に浮かぶ玄界島・港屋旅館がおなじみの場所。ゼミの第1回はここで行なわれる。大型の旅行としては，沖縄旅行（沖縄県庁，フリートレードゾーンその他訪問），山口県祝島（元原子力発電所・労働者と面談），静岡県藤枝水車村・ヤオハンジャパン経由東京旅行（経団連その他訪問）等が行なわれた。特に後者は，鈍行列車を乗り継いで東京にまで行こうという無謀な計画であった。

他には，大分県高崎山見学，夢の農場訪問，北九州市KAITA訪問などがある。

以上のように具体例を示した。注意すべき点は，注釈の通し番号とその記号を，単語や文節の右上に上付きで(1)〜(10)などとマークすることである。そして注釈自体は，論文の結論・後書きの後ろ，参考文献の前に記す。あるいは，注釈を各章内で完結させ，章末に注釈を載せるという手法もある。

これは，なれればごく簡単なルールであるから，何も考えずこの手法を用いるようにする。

次節では参考文献の用い方について述べる。

(5)　参考文献・ビデオ・TVの使い方

本節では，参考文献を用いたときの処理の方法について述べる。

参考文献やその他の資料を明記することは，己の主張の裏付けをするため，あるいはそっくり文章を引用した場合の盗作防止という2点から，極めて重要である。特に本ゼミにおいては，本人の故意・無意識に関わらず，結果として盗作をした，盗作になった場合，指導教官の厳しい指導を受けるであろうことを警告する。

それでは，参考文献の用い方をいくつかの種類に分けてみてみよう。

まず，斎藤ゼミナールでは，参考文献にはそれぞれ記号をつける。例えば齋藤實男著の著作は，その名前のローマ字の最初の3文字をとり，[S_{ai}-1]と表記する。頭文字は大文字，残りは小文字下付きで示す。[　]内の数字は，同じ著者の複数の著作を区別するために用い，著者が同姓の場合は，[S_{ai}・J-1]など，名前の初めの1文字を大文字で示す。では，具体的な方法を見てみよう。

①　([S_{ai}-1] pp.12～5参照)

これは，他者の著作等を参考にしながら自説を述べる場合，各節末・章末に記す。

②　([S_{ai}-1] p.135) or ([S_{ai}-1] pp.135～6)

自説を補強するために，あるいは他者の意見を参考とするために，文献その他から丸々そのまま文章を抜き出して用いるときに記す。引用する直前に，以下に引用する，など断った上で，引用した直後に記す。また，引用した文章は，左端から1～2マス程度空けて，本文と区別がつくようにする。またそれ自体を「　」でくくってもよい。文献の記号は「　」の直後に（　）をつけて記入する。

以上のように，参照・引用した場合に以上のような記号を用いるが，これらを記し忘れた，もしくは記さなかった場合，ただちにその部分は盗作となる。勉学を志し，論文を記すものにとっては，非常に恥ずべき失態であるから，心して上記のルールを守るようにすべきである。

次節では，本節で触れた参考文献の記号について，更に詳しく述べる。

(6)　参考文献の表記法

本節では，参考文献を論文中，どのように表記するかについて述べる。

参考文献の重要さについては，前節で説明した通りである。卒論に使用した文献は，卒論の一番最後，注釈の後に一括して記載するが，その記載方法にも決まりがあるので，以下に説明する。

例えば，3冊の本がある。いずれも齋藤實男氏の著作で『グリーンマーケティング』,『グリーンマーケティングII』,奥村正二氏の著作で『自動車』,この3冊を例にとって具体的に記してみよう。

[O_{ku}-1] 奥村正二『自動車』岩波新書，1957年。

[S_{ai}-1] 齋藤實男『グリーンマーケティング』同文舘，1994年。

[S_{ai}-2] 齋藤實男『グリーンマーケティングII』同文舘，1997年。

まず，前節で示した書物を表わす記号，次に著者名，タイトル，出版社，発行年月日の順に記す。タイトルは必ず『　』でくくる。著作物は，アルファベット順に並べる。これは多少ややこしいが，卒論では完璧にこの決まりにしたがって，参考文献を記さねばならない。また，参考文献が，雑誌に掲載された，あるいはある書物に掲載された論文であるような場合は，次のように記す。

[S_{ai}-3] 齋藤實男「国際グリーン・マーケティング・フレームワーク」『国際社会の展開と生活』九州大学出版会，1996年。

[S_{at}-1] 佐藤達哉/中野隆裕「マツダの自動車リサイクルへの取り組み」『マツダ技法　No.13』1995年。

これは，記号，著者，論文タイトル，本・雑誌タイトル，出版社，発行年月日の順に記してある。論文タイトルを「　」でくくるのがポイントである。

次に，参考文献に新聞を利用した場合は，以下のようになる。まず，論文中に参考文献として上げる場合は，次のように記す。

([N_{is}-1 $_{16/3/97\,[朝]}$])

これは，西日本新聞の1997年３月16日付朝刊を表わす。また，参考文献として論文末尾につける場合には，次のようになる。

[N_{is}-1] 西日本新聞社『西日本新聞』西日本新聞社，各年月日付（$_{16/3/97[朝]}$などは，1997年３月16日付朝刊を表わす）。

また，参考ビデオ・ＴＶは，次のように記す。

【N_{oh}・V-1】農文協〈アイガモ水稲同時作の実際　第１巻　総合効果編〉，1994年。

【R_{KB}-1】ＲＫＢ〈情報スペースＪ〉，1994年２月11日。

記号及びタイトルの括弧は，参考文献と区別がつけばなんでもよい。

以上のように，参考資料記入のルールについて説明してきたが，これを完璧にこなすことで参考資料の整理もでき，確認作業もやりやすくなるはずである。なお，本ゼミナールでは，参考資料の記入方法については“オレ流”は通用しないのでそのつもりで。

これで一通り卒業論文の書き方のルールについては説明を終えた。ここまで説明してきたことを完璧にこなすことが，良い成績をとるための布石であることを肝に命じてほしい。

次章では，卒論を書く上での技術以外の部分について，簡単に述べたいと思う。

2．卒論の内容・心構えについて

本章では，卒業論文を書くその内容について，簡単に述べてみたい。

これから本ゼミに入ってくる学生諸氏は，自分がこれから過ごす２年間で何を追求していくのかをはっきりと決めなければならない。こと，本ゼミに関しては，入ゼミ以前に卒論のテーマを定めておくことが非常に重要である。入ゼミ以後は，授業を初め，TV 等の情報など，多種多様な方面の活動においても，吸収できるものはすべて卒論に取り入れるのだ。これを齋藤氏は「車軸（ハブ）型勉強法」と呼んでいる。

入ゼミ以後，己の研究テーマを変更することは可能ではあるが，望ましくない。筆者の場合で言えば，大学の１年次から興味を持っていた食品公害について研究したが，それは正解であった。好きこそものの上手なれ，理論だけで選んだりすると，集中が続かなかったり，途中であきらめたり

といったことになる可能性が大である。無理せず己がもっとも集中できる，あふれんばかりの興味を持った分野を選ぶことが，卒論成功の秘訣となるであろう。

卒論のテーマを選んだ時点で重要となるのが，自分が何を主張したいのか，という点である。ある種分野を研究すると，さまざまな情報を得，ゼミの発表でも言いたいことが増えてくる。しかし最終的に，卒論の中で自分が何を主張したいのかを見つけなければ，最初から最後までふわふわと進んで終わってしまう。“卒論書いた！”“それで，結局何が言いたかったわけ？”こう聞かれたときにばしっと答えられるよう目指そう。

おわりに

本紙上では，卒論を書く上での技術についてを中心に述べてきた。これを熟読し，参考にしながら，充実した卒業論文を書かれることを望むのである。技術はしょせんは技術であるから，割り切ってそのルールを守ることが重要である。細かな手法の中には齋藤ゼミナール独自の手法もあり，実際，世間にはさまざまなやり方が存在する。もしも，ゼミ生諸氏が他の場所において，どうしても他のやり方で論文を要求されたときには，それに従えば良い。勝負は内容なのであるから。

参考文献

[H_{as}-1] 橋川玄武「自動車のグリーンマーケティング」1997年。
【N_{oh}・V-1】農文協〈アイガモ水稲同時作の実際　第1巻　総合効果編〉，1994年。
[O_{ku}-1] 奥村正二『自動車』岩波新書，1957年。
【R_{KB}-1】RKB〈情報スペースJ〉，1994年2月11日。
[S_{ai}-1] 齋藤實男『グリーンマーケティング』同文舘，1994年。

[S_{ai}-2] 齋藤實男『グリーンマーケティングII』同文舘，1997年。
[S_{ai}-3] 齋藤實男「国際グリーン・マーケティング・フレームワーク」『国際社会の展開と生活』九州大学出版会，1996年。
[S_{at}-1] 佐藤達哉/中野隆裕「マツダの自動車リサイクルへの取り組み」『マツダ技法No.13』1995年。